

# 大動脈瘤患者の 最後の希望 熱血外科医・ 大木隆生の闘いの日々

日本屈指の血管外科医として1日4件、年間800例の手術をこなす。片ときも休まず、患者のために人生をささげる日常は壮絶だ。



46歳の若さにして、日米の医科大学で教授をつとめる。



大動脈にこぶがで、自覚症状がないまま進行。最悪、破裂すれば大量出血によっておよそ9割が死に至る大動脈瘤。この最新の治療法として注目を集めるのが「ステントグラフト」だ。従来の手術は、全身麻酔をしたうえで胸部や腹部を30センチほど切開し、人工血管に置き換える大がかりなもの。高齢者や心臓・呼吸器

14(四) プロフェッショナル  
仕事の流儀  
すべてを捧げて、命をつなぐ  
～血管外科医・大木隆生  
総合 後10:00～10:50

などに持病を持つ人には困難だった。一方、胸や腹を切ることなく、血管内に器具を装着してこぶの破裂を防ぐのがステントグラフトだ。新しい治療法だけに長期の信頼性はまだ確立されていないが、従来の手術ができない患者にとつての最後の希望になっている。

そして、このステントグラフトの世界随一の使い手とされるのが血管外科医・大木隆生だ。アメリカでステントグラフトの開発に携わり、患者たちを次々と救った大木は、名門医科大学の教授に就任。しかし3年前、その地位と名声を捨てた。ステントグラフトの導入が遅れている日本の現状に帰国を決断した。今、手がける血管外科の手術は年間800例にもなる。おちこぼれだった少年時代の経験が生んだ「人に喜んでもらいたい」という気持ちに従って生きている。

この冬、巨大な大動脈瘤の患者が大木のもとにやってきた。破裂が間近に近づいていると察した大木は、日本では彼にしかできない難手術に挑む。熱血医師の魂の現場を追った。